断章

旭川のアイヌ語地名研究 ⑫⑨

高橋 基

―伊野川から忠別川までの地名⑱―

チカプニ→近文→近文町

今回は**掲載地図**のチカプニから、現在の旭川市近文町に至る、「近文」地名の変遷について概観する。

これまで見てきたように、安政四年（一八五七年）に松浦武四郎が、チカプニは山名と明記し、明治十八年に司法大輔で初代北海道庁長官となる岩村通俊が、**チユッカブミ**と聞いた音から「近文」と漢字表記をし、明治二十四年には永田方正が、『北海道蝦夷語地名解』で次のように地名解を書いた。

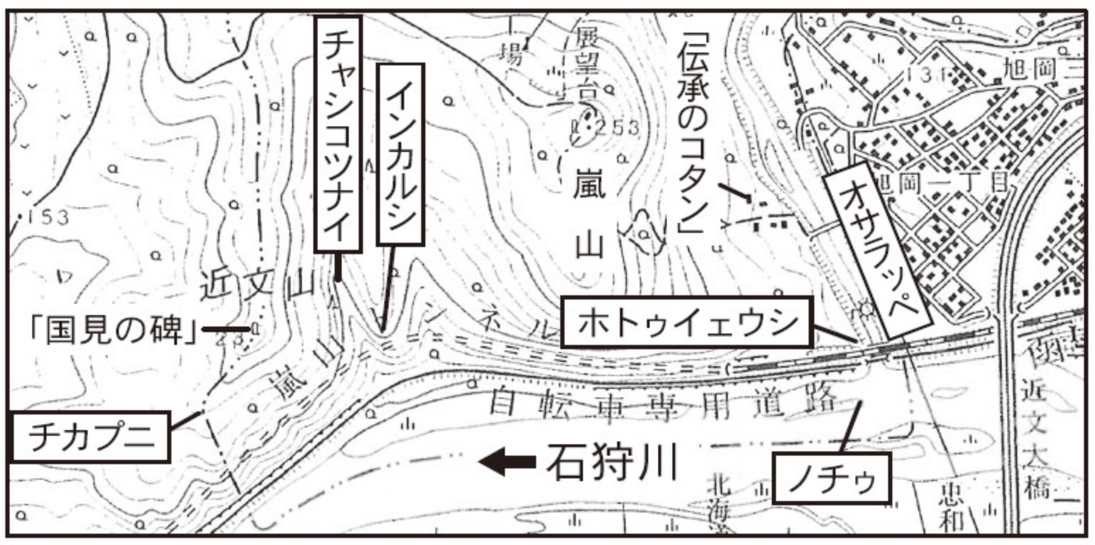
チカプニ(chikapuni=chikap-un-i 鳥居ル処)―此ノ山ノ川ニ臨ミタル処ノ山面ニ大岩アリ。鷹常ニ来テ此ノ岩上ニ止マル。故ニ名ク。

掲載地図のチカプニの位置は、明治三十一年製版の『北海道仮製五万分一図』によったものである。

明治六年に開拓使測量長ワッソンが三角測量で、上川を測量調査する。その時に同行した開拓使少主典平林通恪の『北海紀行』では、「チカブニ　六戸、上チカブニ　七戸」と、戸数と人名と年齢までが書かれている。チカブニのコタンの初めての記録である。

ワッソンの『石狩川踏査図』では、石狩川と忠別川の間に、「Tukabuni チカブ子」と記されている。チカブニが、石狩川の右岸に書かれていないのが、問題が残る地図である。

明治十七年に、内務省地理局地理課の高橋不二雄と、札幌県地理課主任の福士成豊が、石狩川を遡り、石狩岳や旭岳に登り、北海道の中央高地を実測する。その成果は、『改正北海道全図』(明治二十年五月、内務省地理局刊行。銅板、五十万分一図)として完成した。



『改正北海道全図』は、当時としては、最も詳細な北海道地図として、明治十九年に設置された北海道庁の規範図とされた。

地図①は、『改正北海道全図』の旭川付近で、一五〇%拡大したもの。石狩川右岸に「チカフニ」と「チカフニ山」が記載されている。

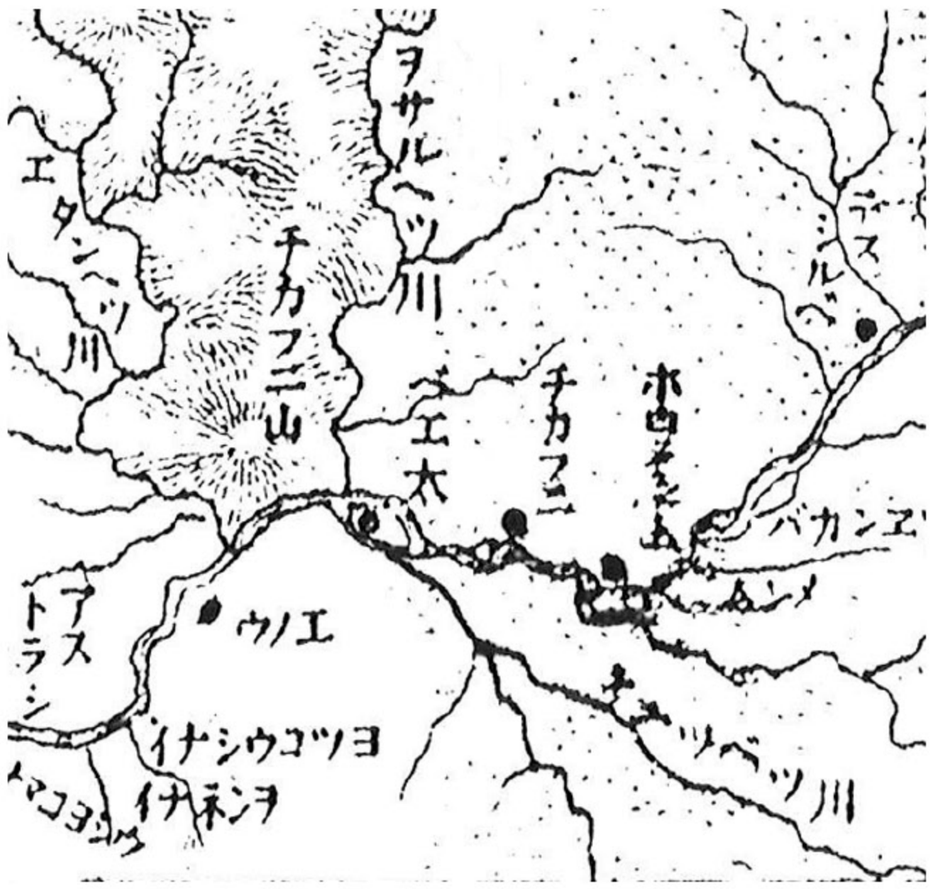
さて、明治二十年に道庁殖民課の福原鉄之輔が責任者となって、石狩国上川郡の原野撰定が実施される。福原鉄之輔は、『改正北海道全図』の「チカフニ」から、石狩川右岸の地に、「チカブニ原野」を撰定する。この「チカブニ原野」は、後に**図②**の『石狩国上川郡近文原野区画図』のように、「近文原野」と漢字表記され、その区画は現在の鷹栖町と石狩川右岸の旭川市域のオサラッペ川から突哨山までの広大な範囲であった。近文原野は、明治二十四年に測設し、区画地の貸付けも同年から行われた。

明治二十五年二月四日に、道庁令第五号で、鷹栖村が設置された。鷹栖村では、明治三十九年から、近文・近文原野・近文区画地等の「近文」の付く行政字を設けた。

明治三十五年には内務省令で、鷹栖村近文六号線(現・旭川市末広高台通)から、オサラッペ川までが、旭川町に編入され、旭川町近文となった。

更に、昭和四十六年には、東鷹栖町が旭川市に編入し、行政字名だった、近文・近文原野・近文区画地等の「近文」の付く地名が、鷹栖町を含めて消滅した。わずかに、旭川市近文、旭川市近文町の地名が現在も使用されている。

明治三十年代に創立開校した、旭川市立近文第一小学校と近文第二小学校が、東鷹栖にあるのは、「近文」地名変遷の象徴である。



①『改正北海道全図』

②『近文原野区画図』タイトル

（アイヌ語地名研究会幹事）

※毎月第1週号に掲載します